

# 東アジアにおける 地理学的想像力と物語の生成・消費

企画趣旨 講演・発表要旨

## 【企画趣旨】

前田愛『都市空間のなかの文学』（1982年）の刊行から35年以上が経過した今日、文学テキストの中に地理的諸条件がいかにかに表象され、物語における登場人物の動きがいかにかに地理的諸条件に規定されたものとして描かれるのか、ということをめぐる議論は、文学テキストに対するアプローチの一つとして定着している。また都市表象を捉えようとする試みは、同時代の国際的な地政学が織り込まれたテキストを解きほぐし、統治権力システムの各階層で生起するさまざまな物語を検討する作業にもつながっていく。本特集は、文学研究において積み重ねられてきた都市表象に関する考察の蓄積を踏まえつつ、近年、隣接諸領域において展開されてきた都市をめぐる議論と文学研究との再接合をはかろうとするものである。

東アジアの都市空間は、アジア太平洋戦争とその後の冷戦・ポスト冷戦期における世界情勢の変遷の中でさまざまな記憶が上書きされ、大きな変容を遂げている。既に80年代都市論が想定した国民国家を基盤とする「首都／地方都市」の関係から、「グローバル都市圏ネットワーク／ドメスティックな都市群」という新自由主義的枠組みに世界の都市空間は再編成されてきている。こうした変容の過程において、どのような空間が物語の中で立ち現れ、消費されていったのか。そこでは、何が記憶として価値を持ち、何が無価値なものとして忘却されようとしているのか。東アジアの各地域を対象とした文学研究者が集う場において、都市表象と文学をめぐる諸問題を包括的に討議したい。

## 【基調講演】 13:10～13:50

1号館 1105 教室

横光利一の地政学—小説『上海』とその周辺—

中国日本文学研究会常務副会長 李 征

「私は巴里へ来てから一層上海の面白さが分って来たような気がする。」と横光利一は後年、『欧州紀行』でこう語る。似たような表現は他のエッセイにもたびたび出て来る。谷崎潤一郎や芥川龍之介の後を追って上海を歩き回った横光の目には、租界都市上海が単なる道路・川・建築によってだけでなく、さらに言語・民族・貨幣などによって形作られた、魅了的な空間として映った。上海の地政学はのちに欧州旅行の地政学にもつながる。上海、ロンドン、パリ、ベルリン、ニューヨーク、モスクワ……世界の地理空間の切り替えにしたがって、「われ想う故にわれ在り」は二十一世紀の今現在にあらためて「われ在る故にわれ想う」として響いてくる。 (復旦大学教授)

【研究発表】 14:00～16:55

第1会場 : 1号館 1101 教室

第2会場 : 1号館 1103 教室

(第1会場 14:00～14:40)

グラフ雑誌『北支』と「興亜」物語

王 志松

『北支』は、華北交通株式会社の北京現地編集と第一書房の日本国内発行という形で1939年から1943年まで刊行されたグラフ雑誌である。この雑誌は、経済、風俗、街の風景、季節の花、日本人の生活断片などの写真と、時事評論、紀行文、芝居評論などの文章で、「北支」現地の状況をリアルタイムで多方面にわたって報道している。留意すべきには、編集部が置かれた華北交通株式会社は、日本陸軍省軍務課主導で設置された北支那開発株式会社の傘下にある実業会社であり、北支事変後日本政府で推進された「興亜政策」の尖兵でもある。したがって『北支』の写真などは、実景撮影であるにもかかわらず、政策宣伝、投資誘致、人材吸引のためという、ある特定の角度からの撮影と編集によって編み出された「興亜」物語（フィクション）だと見なすこともできるであろう。本研究では、『北支』雑誌を対象として「興亜」物語形成のメカニズムおよびその内部の亀裂などを考察してみたい。

(北京師範大学教授)

(第1会場 14:40～15:20)

「武蔵野夫人」 空間と場所そして移動する境界

川崎 賢子

大岡昇平がロマネスクと呼んだ「武蔵野夫人」はGHQ占領末期の都市郊外を舞台に展開する。地方出身で相応の成功者でもあった父親の残した家、その家付き娘のヒロイン、婿養子、フィリピンの戦場の記憶を刻みつけた帰還兵など、登場人物それぞれの背負った記憶に応じて彼らのすまう場所は意味付けられ、読み取られ、消費される。地名と地形と場所の意味に方向付けられたかのように、そこに複数の性愛の関係がもちあがり、土地と金銭と性が交換されるが、その交換は家の共同性を再編することに挫折する。巧みに仕込まれた風俗小説である。溝口健二監督「武蔵野夫人」を小説の読解（そしてアダプテーション、再生産）の一例として参照しつつ、読みの現在の可能性を探る。（立教大学特任教授）

(第1会場 15:35～16:15)

文学が生み出すコンテンツ・ツーリズム：司馬遼太郎作品の事例

フィリップ・シートン

近年ポップ・カルチャーの観光を誘発する力が注目を集め、文学をベースにした観光ブームも少なくない。文学館などの小説家を記念する場だけでなく、小説に描かれるロケーションも重要である。観光客が「想像の場」に赴き、実際に体験する。歴史小説の場合、文学ファンが遺産（歴史博物館、跡石など）を訪れる。テレビ・ドラマ化されると、さらに観光ブームへと発展する場合が多い。本研究は、司馬遼太郎の「坂の上の雲」を中心に扱い、「文学→コンテンツ→観光」というプロセスを分析する。歴史を観光資源として使うためには、魅力的な物語と想像を設けるのが重要である。観光業界のため、映像ではなく「ペンと紙」の重要性、更に明治時代の魅力を描いた司馬氏の観光に対する影響力について分析をする。（東京外国語大学教授）

(第1会場 16:15~16:55)

「救い」はあるのか—『豚の報い』と『虹の鳥』を中心に

郭 炯徳

私は今年、又吉栄喜の『豚の報い』(文藝春秋、1996)と目取真俊の『虹の鳥』(影書房、2006)の韓国語訳出版を控えている。翻訳を終える前までは両作品の接点が見えなかったが、「報い」や「救い」といったキーワードを入れると両作品が本土とオキナワの交差する視線をいかに意識し、あるいは拒否しながら語りを構成しているのかが見えてきた。それは両作品が「物語の生成と消費」において1995年9月に起きた米兵の少女暴行事件や日米安保の揺れと深く関わっていることを意味する。周知の通り、ポスト冷戦期において韓国とオキナワでは「平和」とはかけ離れた時間が流れていた。特に、韓国では民主化の進行と資本主義経済の発達により「平和」な日常が永遠に続くという妄想があったのは否めない。しかし、韓国では一歩踏み外したら「戦争」にすぐ突入するという「分断体制」の厳しい現実が併存していた。本発表ではポスト冷戦期のオキナワと韓国の状況に注目しながら「場所」をめぐる物語の生成と消費の行方を探る。

(明知大学助教授)

(第2会場 14:00~14:40)

スカイスクレーパーの詩学—稲垣足穂と北園克衛の都市表象—

高木 彬

都市表象の歴史は古いが、しばしば近代以降の都市は、スカイスクレーパー、あるいはそのスカイラインとして表象されてきた。アルフレッド・スティューグリッツが1903年に撮影した「フラットアイアン・ビル」(ダニエル・バーナム、1902)のシルエットに、多木浩二は近代都市の原像を見た(『眼の隠喩』)。都市全体を包括的に捉えようとするそうした眼差しは、ポストモダン以降の「ジェネリック・シティ」(レム・コールハース『S,M,L,XL』)において都市がその輪郭線を消失するまで続いていく。では、マンハッタンから高層建築の構造技術が移植され、グローバルな都市圏へと参入しつつあった関東大震災(1923・9)以後の東京は、同時代においてどのように表象されていたのか。スカイスクレーパーを描いた稲垣足穂(1900-1977)や北園克衛(1902-1978)らの文学テクストを手がかりに考察したい。

(龍谷大学講師)

(第2会場 14:40~15:20)

現代短歌に見る長江、黄河そして沿岸の都市

朱 衛紅

日本の川と中国の河では、全く異なる様相である。俳句や短歌の描く河川は単なる描写ではなく、対象と一体化することで心の躍動感を伝えようとする。その微妙さは中国人にはなんとも分かりにくい。李白や杜甫らが描いた長江や黄河は、短い人生に対し悠久なる自然存在そのものであり、茂吉の最上川や啄木の北上川は心の故郷といえた。その意味で短歌の河川観が己個人のレベルをあまり超えないのに比して、漢詩の長江や黄河は己のレベルをはるかに超えるものであった。中日戦争に際して近藤芳美は長江の武漢、上海へ、宮終二は黄河の山西省へと従軍し、それぞれに歌を創作した。これは日本の歌人が中国の大河と出会うという貴重な体験だった。改革開放以後、多くの歌人らが訪中し様々な短歌を創作している。その中では若い世代の俵万智の上海、西安をめぐる歌などが面白い。河川観の相違は物語を成立させる世界認識や自己認識の基底へと通じている。

(上海财经大学准教授)

(第2会場 15:35～16:15)

地理学的想像と表象の新宿

土屋 忍

新宿は、移民の街として独自の発展を遂げてきた。新宿（区）として語られてきた境界を含む圏域としての新宿は、その移動性において活力ある場の力を生成し、「表象の新宿」の創造の源泉にもなってきた。

夏目漱石、芥川龍之介、小泉八雲、国木田独歩、林芙美子といった新宿の文学者たちは、それぞれ「外地」を訪れその体験を意義あるものに行っている。街を読み場所の力を感受し新たな場を生成するというサイクルに言語を通じて寄与するのが文学者である。

移民の街としての新宿表象は、果たしてどのような地理学的想像力を内包してきたのか、「地理学的想像と表象の新宿」に着目することにはどのような意義と可能性があるのか。拙稿「新宿、大久保の記憶と現在-漱石・芥川の街で-」（『社会文学』2015・8）を手掛かりにして論じたい。

(武蔵野大学教授)

(第2会場 16:15～16:55)

越境の童話：木下杢太郎「崑崙山」試論

高 潔

「崑崙山」は1921年（大正10）5月1日発行の児童向け雑誌『童話』に発表され、後に杢太郎の第二小説集『厥後集』に収録された作品である。小説は同時期に作者が翻訳した『支那伝説集』を連想させる中国の神話的、道教的要素をちりばめ、一種の「仙界訪問譚」の体裁を取っている童話であり、作家木下杢太郎は児童の読者を想定しながら、主人公の鴻一少年の父の口を借り、中国から、西域地方、インド、ギリシア、ヨーロッパへと視野を広め、世界的文明史観で世界の歴史を見ることの重要性を説いている。これはまた、実際に南満医学堂教授、兼奉天病院皮膚科部長として中国で四年間生活した作家が自らの越境体験で得たもので、中国の南北を旅行し、美術考古遺物から中国文明の本質を考察した成果と言えよう。四年間の中国生活の締めくくりとして正にふさわしい作品である。

(上海外国語大学教授)